8 獅子舞クラブ

「うわあ、獅子舞だ。人がいっぱいいるぞ。」

ぼくがはじめて獅子舞を見たのは、今年の夏祭りの時です。お父さんとお祭りに行くとたくさんの人でにぎわっていました。ぶ台には笛をふく人、獅子舞をおどる人などが登場してきました。どの人も真けんなまなざしで自分の役をやりとげようとしていました。その中には、ぼくの学校の六年生もいて、少しおどろきました。

二月になり、クラブ見学の日になりました。じゅん番に見学していき、獅子舞クラブの教室に入りました。そこには、六年生と獅子舞ほぞん会の方がいました。

「今日は、わたしたちの大切な獅子舞のおどりと笛をみなさんに見たり聞いたりしてもらいたいと思います。」

六年生はそう言うと、正ざをして獅子の面におじぎをしてからいしょうをつけ始めました。

（どうしておじぎなんかするんだろう。）

いよいよえんぎが始まりました。軽やかな笛のリズムに乗って大きく左右に体を動かし、獅子が生きているように見えました。笛できれいな音を出すほぞん会の方がかっこよく感じられました。

「みんなでやってみよう。」

六年生に言われ、まねして動いてみたけれど、同じようにおどることができません。

（いしょうをつけると動きにくいなあ……。）

笛もふかせてもらったけれど、音が出ませんでした。

（……。）

次のクラブを見に行こうとしたその時、ほぞん会の方が見学に来たみんなにゆっくりと話し始めました。

「この獅子舞はね、西金野井地区に古くからつたわるものなんだよ。この地区のみんなが病気にならないように、お米がたくさんとれるようにというねがいをこめておどっているんだ。」

と、話してくれました。ぼくが、いつからつたわっているのか聞くと、

「江戸時代と言われているよ。」

「えっ、江戸時代からずっと……。」

ぼくがびっくりして言うと、ほぞん会の方は、

「そうだよ。でも、獅子舞をやる人が少なくなってできなくなってしまったことがあってね。それで、獅子舞をずっと、ずうっとつづけなければと思う人たちできょう力して『獅子舞ほぞん会』という会を作ったんだ。きみたちやこの地区のみんなが幸せになることをねがっておどるこの獅子舞を大切にしたくてね。だから、この獅子舞を守っていきたいんだ。きみのような子どもたちが獅子舞をおどってくれることが、何よりもうれしいんだよ。」

と、力強い口調で話してくれました。そして、ほぞん会の方は、また笛をふき始め、六年生のおどる獅子をやさしいえ顔で見つめていました。

（そうだったんだ……。）

次の日、クラブ見学の二日目、獅子の面が体育館にてんじされました。ぼくは、きのうの話が気になって見に行きました。

獅子の面を見ながら、ぼくの住んでいる地区にたくさんの人の思いがつまった獅子舞があることと獅子舞をずっと守ってきてくれたほぞん会の方のことを考え始めました。

てんじされている獅子の面は、夏祭りの時とちがって見えました。